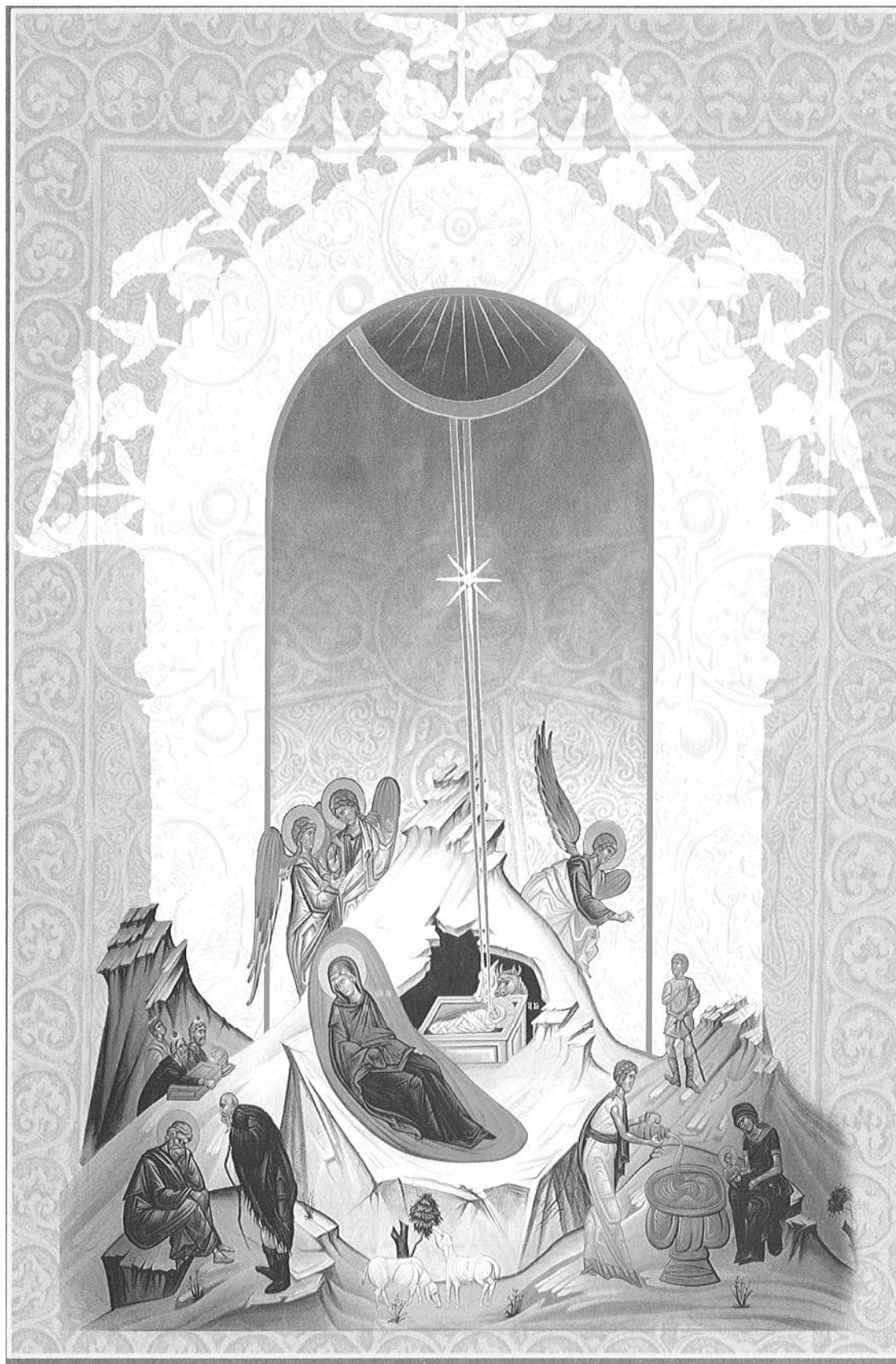


## クリスマスイヴ 代式祈禱



譜面中、五線譜上に|●| とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞（祈禱文）が持つ言葉の自然なリズムに則って歌うことを意味しています。ただ早く歌ってしまったり、棒読みになってしまったりしないようにしてください。

監修 釧路管轄司祭ステファン内田圭一

代禱) <sup>しゅ</sup>主・<sup>かみ</sup>イイスス<sup>こ</sup>ハリストス・<sup>なんじ</sup>神の子よ、<sup>しじょう</sup>爾が<sup>はは</sup>至<sup>しよせいじん</sup>淨の母と<sup>きとう</sup>諸聖人の<sup>より</sup>祈禱に<sup>われら</sup>因て<sup>あわれ</sup>我等を<sup>あわれ</sup>憐み

<sup>たま</sup>給え、



てんのおうなぐさむるものよ、しんじつの  
天 王 慰 者 眞 實

しん、あらざるところなきもの、みたざ  
神 在 所 者 満

るところなきものよ、ばんぜんのほうぞうな  
所 者 萬 善 寶 蔵

るもの、せいめいをたもうのしゅよ、  
者 生 命 賜 主 よ、

きたりてわれらのうちにおり、われらを  
來 我 等 中 居 我 等

もろもろのけがれよりいさぎよくせよ、  
諸 穢 潔

しぜんしゃよ、われらのたましいをすくいた給  
至 善 者 我 等 靈 救 給

ま え。

誦經) <sup>せい</sup>聖なる<sup>かみ</sup>神、<sup>せい</sup>聖なる<sup>ゆうき</sup>勇毅、<sup>せい</sup>聖なる<sup>じょうせい</sup>常生の<sup>もの</sup>者よ、<sup>われら</sup>我等を<sup>あわれ</sup>憐めよ。<sup>せい</sup>聖なる<sup>かみ</sup>神、<sup>せい</sup>聖なる<sup>ゆうき</sup>勇毅、<sup>せい</sup>聖

なる<sup>じょうせい</sup>常生の<sup>もの</sup>者よ、<sup>われら</sup>我等を<sup>あわれ</sup>憐めよ。<sup>せい</sup>聖なる<sup>かみ</sup>神、<sup>せい</sup>聖なる<sup>ゆうき</sup>勇毅、<sup>せい</sup>聖なる<sup>じょうせい</sup>常生の<sup>もの</sup>者よ、<sup>われら</sup>我等を<sup>あわれ</sup>憐

めよ。<sup>こうえい</sup>光栄は<sup>ちち</sup>父と<sup>こ</sup>子と<sup>せいしん</sup>聖神に<sup>き</sup>歸す、<sup>いま</sup>今も<sup>いつ</sup>何時も<sup>よよ</sup>世々に。アミン。<sup>しせいさんしゃ</sup>至聖三者よ、<sup>われら</sup>我等を<sup>あわれ</sup>憐め。<sup>しゅ</sup>主

われら つみ いさぎよ しゅさい われら あやまち ゆる せい もの のぞ われら やまい いや  
よ、我等の罪を 潔くせよ。主宰よ、我等の 愆を赦せ。聖なる者よ、臨みて我等の 病を癒

たま ことごと なんぢ な よ しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ こうえい ちち こ  
し給え。悉く爾の名に因る。主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。光栄は父と子と

せいしん き いま いつ よよ てん いま われら ちち ねがわく なんぢ な せい  
聖神に歸す、今も何時も世に。アミン。天に在す我等の父よ、願は爾の名は聖とせられ、

なんぢ くに きた なんぢ むね てん おこな ごと ち おこな わ にちよう かに こんにち  
爾の國は來り、爾の旨は天に行わるるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日

われら あた たま われら おいめ もの われらゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いざない  
我等に與え給え。我等に 債ある者を我等免すが如く、我等の 債を免し給え。我等を 誘に

みちび なおわれら きょうあく すく たま  
導かず、猶我等を凶惡より救い給え。

代禱) しゅ かみ こ なんじ しじょう はは しょせいじん きとう より われら あわれ  
主・イイススハリストス・神の子よ、爾が至浄の母と諸聖人の祈祷に因て我等を 憐み  
たま  
給え、



代禱) われらあんわ しゅ いの  
我等安和にして主に禱らん、



代禱) うえ くだ あんわ われら たましい すくい ため しゅ いの  
上より降る安和と我等が 靈の救の爲に主に禱らん、



代禱) ぜんせかい あんわ かみ せい しょきょうかい けんりつ およ しゅうじん ごういつ ため しゅ いの  
全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、



代禱) こ せいどう およ しん つつし かみ おそ ころもつ ここ きた もの ため しゅ いの  
此の聖堂、及び信と慎みと神を畏るる心とを以て此に來る者の爲に主に禱らん、



代禱) きょうかい つかさど せんき われら ぜんにつぼん ふしゅきょう せんき われら せんたい だい  
教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教ダニイル、尊貴なる我等の仙台の大

しゅきょう せいせい そんぴん よ ほさいしよく ことごと きょうしゅう およ しゅうじん  
主 教 セラフィム、司 祭 の 尊 品、ハリストスに因る輔 祭 職、悉 くの教 衆、及 び衆 人

ため しゅ いの  
の爲に主に禱らん、



代禱) わがくに てんのう およ くに つかさど もの ため しゅ いの  
我 國 の 天 皇、及 び 國 を 司 る 者 の 爲 に 主 に 禱 らん、



代禱) こ まち およそ まち ちほう およ しん もつ こ うち お もの ため しゅ いの  
此 の 都 邑 と 凡 の 都 邑 と 地 方、及 び 信 を 以 て 此 の 中 に 居 る 者 の 爲 に 主 に 禱 らん、



代禱) きこうじゅんわ ごこくほうじょう てんかたいへい ため しゅ いの  
気 候 順 和、五 穀 豊 穰、天 下 泰 平 の 爲 に 主 に 禱 らん、



代禱) こうかい もの りょこう もの やまい うれ もの かんなん あ もの とりこ もの およ かれら  
航 海 する 者、旅 行 する 者、病 を 患 うる 者、艱 難 に 遭 うる 者、擄 となりし 者、及 び 彼 等

すくい ため しゅ いの  
の 救 の 爲 に 主 に 禱 らん、



代禱) われらもろもろ うれい いかり あやうき まぬが ため しゅ いの  
我 等 諸 の 憂 愁 と 忿 怒 と 危 難 と を 免 る が 爲 に 主 に 禱 らん、



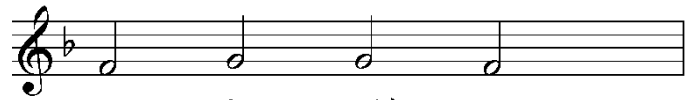
代禱) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも  
神 よ、爾 の 恩 寵 を 以 て、我 等 を 佑 け 救 い 憐 み 護 れ よ、



代禱) しせいしけつ いた さんび われら こうえい ちよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ  
至 聖 至 潔 に して 至 り て 讚 美 た る 我 等 の 光 榮 の 女 宰、生 神 女、永 貞 童 女 マリヤ と、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み も ならび ことごと われら いのち も  
諸 聖 人を記憶して、我等 己 の身及び 互 に 各 の身を以て、並 に 悉 くの我等の生命を以

て、ハリストス<sup>かみ</sup>神に委託せん、



しゅ な んぢ に 。  
主 爾

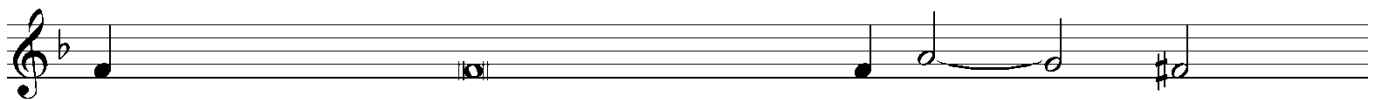
代禱) しゅ かみ こ なんじ しじょう はは しよせいじん きとう より われら あわれ  
主・イイススハリストス・神の子よ、爾 が至 浄の母と 諸 聖 人の祈禱に 因て我等を 憐

たま  
み 給え、



ア ミ ン。

代禱) しゅ かみ われら て しゅ な よ きた もの あが ほ  
主は神なり我等を照らせり、主の名に依りて来る者は 崇め讃めらる、



しゅ は か み な り 、 わ れ ら を て ら せ り 、  
主 神 我 等 照

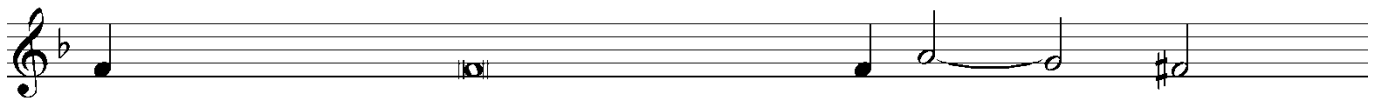


しゅ の な に よ っ て き た る も の は 、 あ が め ほ め  
主 名 依 来 者 崇 讃



ら る 。

代禱) しゅ とうと ほ かれ じんじ そのあわれみ よよ  
主を 尊み讃めよ、彼は仁慈にして其 憐 は世世にあればなり、



しゅ は か み な り 、 わ れ ら を て ら せ り 、  
主 神 我 等 照



しゅ の な に よ っ て き た る も の は 、 あ が め ほ め  
主 名 依 来 者 崇 讃



ら る 。

代禱) かれらわれ かこ われ めぐ われしゅ な も これ やぶ  
彼等我を圍み我を環れども、我 主の名を以て之を敗れり、

しゅ は か み な り、 わ れ ら を て ら せ り、  
 主 神 我 等 照

しゅ の な に よ っ て き た る も の は、 あ が め ほ め  
 主 名 依 来 る 者 崇 讃

ら る。

代禱) <sup>われし</sup>我死せず、<sup>なおい</sup>猶<sup>しゅ</sup>生きて<sup>おこな</sup>主の<sup>ところ</sup>行<sup>った</sup>う所を傳えん、

しゅ は か み な り、 わ れ ら を て ら せ り、  
 主 神 我 等 照

しゅ の な に よ っ て き た る も の は、 あ が め ほ め  
 主 名 依 来 る 者 崇 讃

ら る。

代禱) <sup>こうし</sup>工師が<sup>す</sup>棄てし<sup>ところ</sup>所の石は<sup>いし</sup>屋隅の<sup>おくぐう</sup>首石となれり、<sup>しゅせき</sup>是主の<sup>これしゅ</sup>なす<sup>ところ</sup>所にして<sup>われら</sup>我等の<sup>め</sup>目に<sup>きい</sup>奇異なりと

す、

ハリス ト ス わ が か み よ、 なん ぢ の こ う た ん は せ か  
 我 神 爾 降 誕 世 界

い に ち え の ひ か り を て ら せ り、 こ れ に よ  
 智 慧 光 照 此 由

り て ほ し に つ と む る も の は ほ し に お し え  
 星 勤 者 星 教

ら れ て、 なん ぢ ぎ の ひ を お が み、  
 爾 義 日 拝

なんぢう えよりのひがしをさとれり。  
 爾 上 東 覚

しゅよ、こうえいはなんぢにきす。  
 主 光 榮 爾 歸

代禱) <sup>えいち</sup> 睿智、<sup>われしののめ</sup> プロキメン、<sup>まえ</sup> 我黎明の<sup>はら</sup> 前に<sup>なんぢ</sup> 腹より <sup>う</sup> 爾 <sup>しゅ</sup> を<sup>ちか</sup> 生めり、<sup>く</sup> 主は<sup>く</sup> 誓いて<sup>く</sup> 悔いず、

われしののめのまえにはらよりなんぢをうめ  
 我 黎 明 前 腹 爾 生

り、しゅはちかいてくいず。  
 主 誓 悔

代禱) <sup>しゅ</sup> 主、<sup>わ</sup> 我が<sup>しゅ</sup> 主に<sup>い</sup> 謂えり、<sup>なんぢわ</sup> 爾 <sup>みぎ</sup> 我が<sup>ざ</sup> 右に<sup>わ</sup> 座して<sup>なんぢ</sup> 我が <sup>てき</sup> 爾 <sup>なんぢ</sup> の<sup>あし</sup> 敵を <sup>だい</sup> 爾 <sup>な</sup> の<sup>いた</sup> 足の<sup>な</sup> 堯と<sup>いた</sup> 爲すに<sup>な</sup> 至れ、

われしののめのまえにはらよりなんぢをうめ  
 我 黎 明 前 腹 爾 生

り、しゅはちかいてくいず。  
 主 誓 悔

代禱) <sup>われしののめ</sup> 我黎明の<sup>まえ</sup> 前に<sup>はら</sup> 腹より <sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>う</sup> を<sup>う</sup> 生めり、

しゅはちかいてくいず。  
 主 誓 悔

代禱) <sup>えいち</sup> 睿智、<sup>つつし</sup> 肅 <sup>た</sup> みて<sup>せいふくいんけい</sup> 立て、<sup>き</sup> 聖福音經を<sup>き</sup> 聴く<sup>でん</sup> べし、<sup>せいふくいんけい</sup> マトфей傳の<sup>よみ</sup> 聖福音經の<sup>よみ</sup> 讀、

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
 主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。  
 爾 歸

代禱) つつ 謹みて聴くべし。イイススハリストスの生まるること左の如し、其母マリヤ、イオシフに聘せられて、未だ婚せざる先に、聖神に由りて孕めること見れたり。その夫イオシフは義人にして、之を顯にせんことを欲せず、私に彼を離さんことを望めり。然れども此の事を思へる時、視よ、主の使夢に彼に現れて曰えり、ダヴィドの子イオシフよ、爾の妻マリヤを納るることを懼るる勿れ、蓋其内に孕まれし者は聖神に由るなり、彼は子を生まん、爾其名をイイススと名づけん、彼其民を其罪より救わんとすればなり。凡そ此の事の成りしは、主が預言者を以て言いし所に應うを致す、曰く、視よ、童女孕みて子を生まん、其名はエムマヌイルと稱えられん、譯すれば神我等と偕にするなり。イオシフ寐より起きて、主の使の彼に命ぜし如く行い、其妻を納れたり。惟未だ室を同じくせざるに、其冢子を生むに迨べり、則其名をイイススと名づけたり。

しゅよ、こうえいはなんちにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 光 榮  
はなんちにきす。  
爾 歸

代禱) かみ なんぢ おおい あわれみ よ われら あわれ なんぢ いの き い あわれ  
神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、

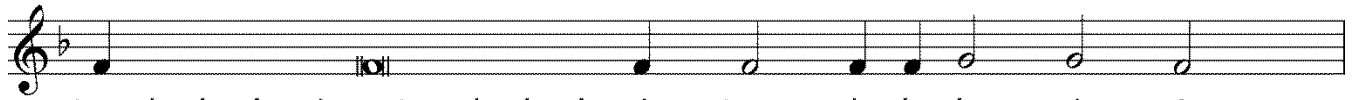
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

代禱) またわがくに てんのうおよ くに つかさど もの ため いの  
又我國の天皇及び國を司る者の爲に禱る、

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

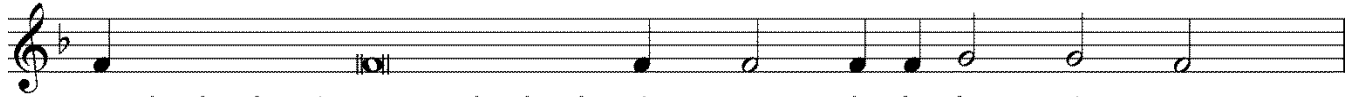
代禱) またきょうかい つかさど そんなき われら ぜんにつぼん ふしゅきょう そんなき せんたい しゅきょう  
又教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教ダニイル、尊貴なる仙台の主 教セラフィム、及びハリストスに於ける 悉くの我等の兄弟の爲に禱る、





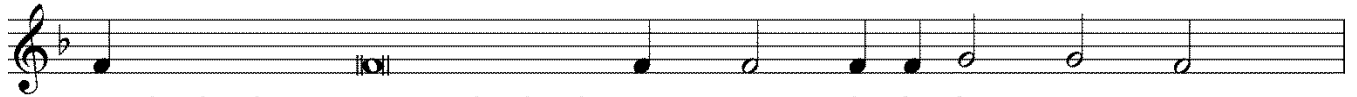
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

代禱) またつね きおく ふく こ せいどう こんりゅうしゃ およ すで ねむ ことごと ふそけいてい こ  
の 處 と 諸 方 と に 葬 ら れ た る 正 教 の 者 の 爲 に 禱 る、



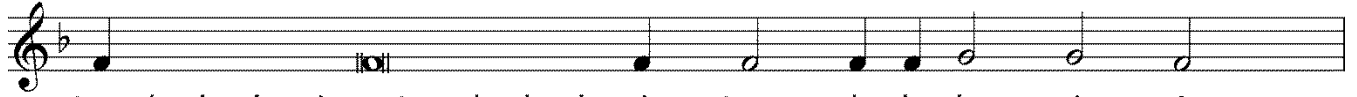
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

代禱) またかみ しょぼく こ せいどう けいてい じれん せいめい へいあん そうけん きゅうしょく けんこ かんゆう  
及 び 諸 罪 の 赦 を 賜 わ ん が 爲 に 禱 る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

代禱) またこ せいどう もの たてまつ ぜんぎょう おこな これ ろう これ うた およ ここ た なんぢ  
の 大 に して 豊 なる 憐 を 仰 ぎ 望 む 者 の 爲 に 禱 る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

代禱) かみわ きゅうせいしゅ ち しきよく とお うみ お もの たのみ われら き たま しゅさい われ  
等 の 罪 に 慈 憐 を 垂 れ、 慈 憐 を 垂 れ て 我 等 を 憐 み 給 え、 主 ・ イ ス ス ハ リ ス ト ス ・ 神 の 子 よ、  
爾 が 至 浄 の 母 と 諸 聖 人 の 祈 禱 に 因 て 我 等 を 憐 み 給 え、



ア ミ ン。

代禱) しゅ いの  
主 に 禱 ら ん、



しゅあわれめよ。  
主 憐

代禱) しゅさい しゅ かみ ぜん の う しゃ なんぢ おい どうていぢよ うま  
主 宰 ・ 主 ・ 神 ・ 全 能 者 よ、 爾 が イ ウ デ ヤ の ヴ ィ フ レ エ ム に 於 て 童 貞 女 マ リ ヤ よ り 生 れ

とき ぞうぶつ て せかい なんぢ こうたん よろこ ひと なんぢ ぞう しょう よ つく  
 し時、造物は照らされ、世界は爾の降誕を欣べり、人を爾の像と肖とに由りて造り、  
 およ これ かいがい せんれい たま なんぢ しょぼくひ こ い とうと ひ みちび い しょよく  
 及び之に悔改の洗禮を賜い、爾の諸僕婢を此の至と尊き日に導き入れて、諸愆の  
 せつせい ふくかつ のぞみ え しゅ かれら なんぢ しんせい しんり おし かれら こころ ちしき  
 節制、復活の冀望を得せしめし主よ、彼等に爾が神性の眞理を教え、彼等の心と智識と  
 ひら なんぢかみ こぜんせかい つみ にな もの し たま しゅさいひと あい しゅ かつ うみ  
 を啓きて、爾神の子全世界の罪を任う者を知らしめ給え、主宰人を愛する主よ、曾て海  
 おぼ またみ なんぢ そむ いた な い ごと いま なんぢ しょぼくひ い たま  
 に溺れ、又三たび爾に背きて痛く泣きしペトルを納れしが如く、今も爾の諸僕婢を納れ給  
 しゅさい かつ ぜいり たんそく およ な そのなみだ も なんぢ あし うるお かしら け も これ  
 え、主宰よ、曾て税吏の歎息、及び泣きて其涙を以て爾の足を濕し頭の髪を以て之  
 むぐ いんぷ じれん よ い ごと いま なんぢ しょぼくひ なみだ たんそく くやみ い たま  
 を拭いし淫婦を慈憐に由りて納れしが如く、今も爾が諸僕婢の涙と歎息と悔とを納れ給  
 かつ じゅうじか あ なんぢ しゅ なんぢ くに きた とかわれ おも たま よ とうぞく  
 え、曾て十字架に在りて、爾に、主よ爾の國に來らん時我を憶い給えと籲びし盜賊に、  
 こんにちわれ とも てんどう あ い これ い ごと いま なんぢ しょぼくひ い たま しゅ  
 今日我と偕に天堂に在らんと曰いて之を納れしが如く、今も爾の諸僕婢を納れ給え、主よ、  
 われら なんぢ かみ にんげん すくい ため にくたい あらわ じせき き そのときはかせ れいもつ  
 我等は爾が神にして人間の救の爲に肉體に顯れし事蹟を聞けり、其時博士は禮物を  
 さき ふくはい ぼくしゃ ふえ ふ しんしら うた よ い たか こうえいかみ き ち  
 獻げて伏拝し、牧者は籥を吹き、神使等は歌いて籲べり、至と高きには光榮神に歸し、地に  
 へいあんくだ ひと めぐみ のぞ ただ こころみだ しゅさいひと あい しゅ いま  
 は平安降り、人に恵は臨めりと、唯イロドは心亂れたり、主宰人を愛する主よ、今  
 ことごと ぞうぶつ なんぢ ほ うた い うま あが ほ てん むか  
 悉くの造物は爾を讃め歌いて曰う、ハリストス生る、崇め讃めよ、ハリストス天よりす、迓  
 えよ、ハリストス地に在り、上れよと、今神使等の會は欣び、致命者の群は樂む、願くは  
 われらみななんぢ こうえい とうと こうたん み こころ くち も よろ かな これ あが ほ  
 我等皆爾の光榮なる尊き降誕を瞻て、心と口とを以て、宜しきに合いて之を崇め讃め  
 しぜん ひと あい しゅ もと こ なんぢ しょぼくひ そのし し じゅう じゅう  
 ん、至善にして人を愛する主よ、求む此の爾の諸僕婢、其知ると知らざる、自由と自由なら  
 つみ くや もの い たま なんぢ つね じんあい も かれら きはい ものいみ い かれら  
 ざる罪を悔む者を納れ給え、爾が恒の仁愛を以て、彼等の跪拝と齋とを納れて、彼等に  
 さいき お いまなんぢ せい とうと こうたん いた いさぎよ きず なんぢ しじょう たいしそん ち  
 齋期を終え、今爾が聖なる尊き降誕に届り、潔く玷なく、爾が至淨の體至尊の血を  
 う もの な え たま しゅ かみ こ なんぢ しじょう はは しょせいじん  
 領くる者と爲るを得せしめ給え、主・イイススハリストス・神の子よ、爾が至淨の母と諸聖人  
 きとう より われら あわれ たま  
 の祈禱に因て我等を憐み給え、



代禱) えいち しせい しょうしんぢよ われら すく たま  
 睿智、至聖なる生神女よ、我等を救い給え。

いま しょ ぢよ は いま しょぢよ は え  
今 処 女 今 処 女 永

い ざ い の しゅ を う む しゅ を  
在 の 主 を 生 む 主 を

う む 、  
生 む 、

ち は ち は の せ が た き  
地 は 地 は の 戴 が 難 き

も の に ほ ら を け ん ず ほ ら を  
者 の に 洞 ら を 獻 ん ず 洞 ら を

け ん ず 、  
獻 ん ず 、

て ん の つ か い て ん の つ か い ぼ く し ゃ  
天 の 使 い 天 の 使 い 牧 者

と と も に ほ め う と う ほ め う  
と 借 に 讚 め 歌 と う 讚 め 歌

と う 、  
と う 、

は か せ は は か せ は ほ し に し た  
博 か 士 は 博 か 士 星 し に 従

が っ て た び す る た び す る 、  
が っ て た 旅 び す る た 旅 び す る 、

け だ し わ れ ら の た め に え い き ゆ う の  
 蓋 我 等 の 爲 永 久  
 か み 、 み ど り ご と し て う ま れ た り 、  
 神 嬰 児 生  
 み ど り ご と し て う ま れ た り 。  
 嬰 児 生

代禱) <sup>しゅ</sup>主・<sup>かみ こ</sup>イイススハリストス・<sup>なんじ</sup>神の子よ、<sup>しじょう</sup>爾が<sup>はは</sup>至<sup>しよせいじん</sup>淨の母と諸<sup>きとう</sup>聖人の<sup>より</sup>祈禱に<sup>われら</sup>因て我等を<sup>あわれ</sup>憐み  
<sup>たま</sup>給え、

ア ミ ン。

か み よ 、 わ が く に の て ん の う 、 お よ び  
 神 我 國 天 皇 及  
 く に を つ か さ ど る も の 、 わ れ ら の ふ し ゅ  
 國 司 者 我 等 府 主  
 き ょ う ダ ニ イ ル 、 だ い し ゅ き ょ う セ ラ フ ィ ム 、 お よ び  
 教 大 主 教 及  
 こ と ご と く の せ い き ょ う の ハ リ ス テ ィ ア ニ ン ら を 、  
 悉 正 教 等  
 い く と せ に も ま も り た ま え 。  
 幾 歳 護 給